『とはずがたり』の疑問表現（下）

――要判定疑問表現の場合――

磯部佳宏

一　はじめに

筆者は、これまで、古代日本語の疑問表現について、『源氏物語』『今昔物語集』『覚一本　平家物語』を資料として考察してきた。疑問表現を「要説明」と「要判定」の二種に大別し、さらにそれぞれいくつかの形式に分類して、各々の形式の性格、そしてその史的変遷についても、ある程度明らかになったと考えている。

ただし、位相論的見地からみると、『今昔物語集』や『覚一本　平家物語』は、『源氏物語』とは作品の性格が大きく異なることから、まず、院政期の資料として『讃岐典侍日記』を取り上げ、『今昔物語集』における疑問表現の用例との比較を行なった。そして、前稿では、中世の女流日記文学『とはずがたり』を取り上げ、その要説明疑問表現について、『覚一本　平家物語』の場合との比較を試みた。[注(1)]

その結果、『とはずがたり』の要説明疑問表現には、

①文中用法の助詞「カ」を使用する形式で、反語表現の場合に、「カ」の係る述語文節で文の完結しない用例が存在する。

②「疑問詞――ニカ。」に近似する性格の表現として「疑問詞――ヤラム。」の形式が多用される。

③要説明疑問表現における「問い」の表現として「疑問詞――ゾ。」の形式が主用される。

など、『覚一本　平家物語』の場合とかなり共通の要素がみられる一方で、

④文中用法の助詞「カ」を使用する形式における反語表現の場合、文末語として「ベシ」より「ム」が多い。

⑤『覚一本　平家物語』では全く用例の存在しなかった「疑問詞――ニカ。」の形式が多用される。

⑥「疑問詞――ゾ。」の形式の場合に、心中思惟において、言語主体の強い感情表現として使用されている用例も目立つ。

など、むしろ中古の『源氏物語』の方に近い性格も存在していた。

そこで、『覚一本　平家物語』と共通の要素は、中世的な語法の反映、また『源氏物語』の方に近い要素については、作品の性格に関わっているのではないかと考えられた。

本稿では、『とはずがたり』の要判定疑問表現について、やはり、主として『覚一本　平家物語』の場合との比較をしながら考察して

みたい。（テキストは「完訳日本の古典　とはずがたり」（小学館）。本文引用の際は、句読点など私意により改めた場合がある。また、心中思惟の部分には〈　〉を付した。なお、「とはずがたり総索引」（笠間書院）も参照した。）

なお、『覚一本　平家物語』の要判定疑問表現には、『源氏物語』の場合と比較して次のような特徴がみられた[注(2)]。

①文中用法の「ヤ」を使用する形式の場合、いくつかの類型的な表現が目立つ。

②「――ニヤ。」の形式とならんで、中世になって新たに生まれた「――ヤラム。」の形式も使用されているが、前者が地の文における用例が圧倒的多数で、特に挿入句的用法が目立つのに対し、後者は会話文において、言語主体の「疑い」の表現として使用されている例が多い。

③文末用法の「ヤ」を使用する形式は、全体に用例数が少なく、依頼・反語など用法もかなり限定されており、純粋な「問い」の表現として使用されている例はごくわずかである。

④文末用法の「カ」を使用する形式は、文末用法の「ヤ」を使用する形式の用例数の約五倍となり、『源氏物語』の場合とは完全に逆転し、身分の上位者へ対する使用例もみられるなど、会話文における「問い」の表現としての用法が圧倒的に増加し、「問い」の表現形式として、文末用法の「ヤ」を使用する形式に代わって、一般化している。

二　要判定疑問表現の諸形式

表1は、当作品の要判定疑問表現を次の諸形式に分類し、それぞれ用例数を示したものである。なお、和歌における用例・底本に見られる注記における用例は除外した。

【表1】

61	a
45	b
3	c
172	d
2	e
1	f
9	g
1	h
28	j
6	k
1	l
1	m
16	p
3	x
349	計

A文中用法の「ヤ」に関わる形式

(a)――ヤ――。

「ヤ」が断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に下接して「ニヤ」の形となっている場合は、別の形式として除外する。

(b)――ヤ。

(a)形式の「ヤ」以下が省略されているもの。同様に「ニヤ」の形のものは別形式として除外する。なお、「ヤ」で終止しているわけではないが、「これや限り。」（巻一）のように名詞止めの形が2例みられるが、便宜的に文末の省略として扱い、この形式に含める。

(c)――ニヤ――。

(a)形式から除外した「ニヤ」の形となるもの。

(d)――ニヤ。

(b)形式から除外した「ニヤ」の形となるもの。

(e)――ヤハ――。

(a)形式の「ヤ」に、さらに助詞「ハ」の下接しているもの。

(f)――ヤハ。
(b)形式の「ヤ」に、さらに助詞「ハ」の下接しているもの。
B文末用法の「ヤ」に関わる形式
(g)――ヤ。
(h)――ヤハ。
(g)形式の「ヤ」に、さらに助詞「ハ」の下接しているもの。
C文末用法の「カ」に関わる形式
(j)――カ。
(k)――カハ。
(j)形式の「カ」に、さらに助詞「ハ」の下接しているもの。
Dその他の形式
(l)――カ――。
(a)形式の「ヤ」の代わりに、文中用法の助詞「カ」の使用されているもの。
(m)――ニカ。
(d)形式の「ヤ」の代わりに、文中用法の助詞「カ」の使用されているもの。
(p)――ヤラム。
文末に複合辞「ヤラム」が使用されているもの。
(x)存疑例

表2は、このうち、(a)・(b)・(c)・(d)・(g)・(j)・(p)の7形式について、『源氏物語』および『覚一本 平家物語』の場合と比較するために、それぞれの使用率を示したものである。

【表2】

	a	b	c	d	g	j	p	総計
源氏	469 (34.8%)	186 (13.8%)	138 (10.2%)	303 (22.5%)	178 (13.2%)	74 (5.5%)	0 (0%)	1,348 (100%)
平家	227 (44.6%)	30 (5.9%)	4 (0.8%)	41 (8.1%)	32 (6.3%)	148 (29.1%)	27 (5.3%)	509 (100%)
とはず	61 (17.5%)	45 (12.9%)	3 (0.9%)	172 (49.3%)	9 (2.6%)	28 (8.0%)	16 (4.6%)	349 (100%)

三 「――ヤ――。」の形式

表3は、当作品にみられる(a)形式全61例について、用法別に文末の形を まとめたものである。なお、表中の「ø」は、文末に推量の助動詞や終助詞の含まれていない場合を示す。また、「疑い」「問い」という用語の概念については、会話文において、対話相手に対して解答を要求しようとする姿勢のみられるものを「問い」の表現と考え、それ以外はすべて「疑い」の表現と考える。したがって、会話文で用いられていても、相手に積極的に解答を求めているとは思われない場合は「問い」の表現とは考えないし、心中思惟における用例は、自問自答的色彩の強く感じられる場合も含めて、すべて「疑い」の表現であると考える。

【表3】

	ム	ケム	ラム	マシ	ベシ	ø	計
疑い	22	9	7	4	2	10	54
問い						2	2
反語	1				1	3	5
計	23	9	7	4	3	15	61

当作品の場合、この形式は、「疑い」の表現として使用されている用例が圧倒的に多く、「問い」の表現と考えられるのは、

(1)（院）「あな悲しや。人やある。人やある」と仰せらるれども、きと参る人もなし。（巻二）

の用例のみであり、反語表現と考えられる用例も5例のみだが、そのうち1例は、

(2)聖衆の来迎よりほかは、君の御幸に過ぎたるやあるべきに、いとかすかに見送りたてまつるばかりにて、（巻一）

のように、係助詞「ヤ」の係る述語文節で文の完結しない形である。他の4例中3例は、文末「ø」の形で、

(3)言ふにや及ぶ、「かかることやは」とも言ふべきことは。（巻一）

(4)その御跡なれば、申すにや及ぶ、……、藤門執柄の流れよりも出でたまひき。（巻四）

のように、地の文における用例が2例、

(5)また、〈小野小町も、……、我ばかり物思ふとや書き置きし〉など思ひつづけても、（巻四）

のように、心中思惟における用例が1例である。残る1例は、文末語「ム」の形で、

(6)御陪膳を勤むるにも、〈心の中を人や知らむ〉と、いとをかし。（巻二）

のように、心中思惟における用例である。

「疑い」の表現の場合、文末語「ム」の形が最も多いが、22例中15例は、

(7)（父）「……」など、いつよりもこまやかに言はるるも、〈これや教への限りならむ〉と悲しきに、（巻一）

(8)人の物言ひも恐ろしければ、〈亡き御陰のあとまでも、よしなき名にや止めたまはむ〉と思へば、（巻三）

のように、心中思惟における用例であり、会話文における用例は、

(9)「正月の儀式にて、台盤所に並べ据ゑられたらむも、余りに珍しからずやはべらむ。……」など、公卿たち面々に申さるるに、（巻二）

のように、言語主体が自己の主張を柔らげる性格のものである。文末語「ラム」の場合も、7例中6例までが、

(10)天下諒闇にて、音奏・警蹕止まりなどしぬれば、〈花もこの山のは墨染にや咲くらむ〉とぞおぼゆる。（巻一）

のように、心中思惟における用例であるが、文末語「ケム」の場合は、9例中7例までが地の文における用例で、

(11)とかく泣きさまたれ居たれども、酔ひ心地やただならざりけむ、つひに明けゆくほどに帰したまひぬ。（巻二）

のように、挿入句的用法が目立つ。また、文末「ø」の形も全10例存在するが、

(12)朝恩をもかぶりて、あまたの年月を経しかば、〈一門の光ともなりもやする〉と、心の内のあらましもなどか思ひよらざるべきなれども、（巻四）

のように、「ヤ」に助詞「モ」の上接した「モヤ」の形が3例みられ、

(13)御瘧心地など申せば、人知れず、〈今や落ちさせおはしましぬとうけたまはる〉と思ふほどに、（巻五）

のように、「今や」の形で、言語主体がさし迫った事態と認識していると考えられる用例もみられるが、いずれも『覚一本　平家物語』にも存在した形である。また、

(14)（作者）〈返し遣はしやする〉など思ふほどに、（飯沼左衛門尉ハ）また立ち帰り、旅の衣など賜はせて、（巻四）

(15)〈ここよりや、止まる止まる〉と思へども、立ち帰るべき心地もせねば、（巻五）

のように、言語主体の意志を表しているとみられる場合にも、助動詞の使用されていない例が目立つ。

なお、(a)形式の係助詞「ヤ」に、さらに係助詞「ハ」の下接した、(e)形式の場合、全2例と用例数が極端に少なく、いずれも反語表現として使用されている。

四　「――ニヤ。」の形式

『源氏物語』においては、文中用法の助詞「ヤ」を用いる要判定疑問表現のうち、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に「ヤ」が下接し、「ニヤ」の形となっている、(c)・(d)形式が多用されていた。これらの形は、築島裕氏が「訓点には殆ど見られないやうである」と指摘されていることから、中古和文に特徴的な表現であると考えられた。また、『覚一本　平家物語』の場合、要説明疑問表現において、この形式と対応する「ニカ」の形が全く存在しなかったのに対し、「ニヤ」の形を用いる(c)・(d)形式は、それぞれ4例・41例とかなりみられたが、それでもその使用率は『源氏物語』と比較するとはるかに低かった。

当作品の場合、(c)形式は、3例のみで、

(16)夜もすがら泣き明かしける袖の涙も、髪は、洩りにやあらむ、また涙にや、洗ひたるさまなり。（巻二）

(17)まして、上下男たちの興に入りしさまは、ことわりにやはべらむ。（巻二）

のように、いずれも地の文で使用されているが、(17)の用例は、読者に対する敬語表現を含む形である。

これに対して、「ニヤ」の形で文の終止している(d)形式は全172例と圧倒的多数使用されており、当作品における要判定疑問表現全体の約半数がこの形式となっている。そのうち、三分の二近くの105例までは、地の文における用例で、特に、

(18)八月にや、東二条院の御産、角の御所にてなるべきにてあれば、（巻一）

(19)九月の八日よりにや、延命供始められて、七日過ぎぬるに、（巻二）

(20)弥生の初めつ方にや、常よりも御人少なにて、夜の供御などいふこともなくて、（巻三）

(21)十月の末にや、都にちと立ち帰りたるもなかなかむつかしければ、（巻四）

(22)十六日の昼つ方にや、「はや御事切れたまひぬ」と言ふ。（巻五）

のように、全巻を通じて、全36例と、日次がこの形式で一貫して示されているのが目立つ。日次以外でも、地の文における用例は、

(23)御験者、証空が命に代はりける本尊にや、絵像の不動、御前に掛けて、（巻一）

(24)とにかくに言ひなして、つひに見参に入らぬに、暮れゆく年に驚きてにや、文あり。（巻二）

(25)玄輝門院、三位殿と申す御ころのことにや、「……」と申せば、「…

…」とてあり。　（巻三）

(26)夜の雲収まり尽きぬれば、月の行く方なきにや、空澄み昇りて、　（巻四）

(27)西園寺へまかりて、「……」と案内すれば、墨染の袂を嫌ふにや、きと申し入るる人もなし。　（巻五）

のように、挿入句的に使用されている例が目立ち、地の文における用例105例中98例までが挿入句的用法のものである。いずれにしても、地の文における、この(d)形式の多用が、当作品の一種の文体的特徴を作り出していると考えられる。

また、この(d)形式のうち43例は、

(28)〈……〉など案ぜらるるは、〈なほ心のありけるにや〉とあさまし。　（巻一）

(29)〈……〉と思ふにぞ、〈道のほだしはこれにや〉と思ひつづけられて、　（巻三）

(30)棟門のゆゑゆゑしきが見ゆれば、〈堂などにや〉と思ひて立ち入りたるに、　（巻四）

のように、心中思惟における用例で、言語主体の「疑い」の表現として使用されており、会話文における用例も全20例中13例は、

(31)湯などだに見入れはべらざりしかば、（人々）「別の病にや」など申し合ひて、　（巻一）

(32)漫々たる海の上に漕ぎ出でたらむ心地して、（新院）「二千里の外に来にけるにや」など仰せありて、　（巻三）

のように、「疑い」の表現と考えられる性格のものであるが、他の7例は、

(33)（院）「……。などかまた、おのおの見継がざりつるぞ。一同せられけるにや」と、面々に恨み仰せらるるほどに、　（巻二）

(34)隆良、「文」とて持ちて来たり。（作者）「所違へにや」と言へども、しひて賜はすれば、　（巻三）

(35)御そば近く参りたるを、（遊義門院ハ）あやしげに御覧ぜられしかば、（作者）「いまだ御幼くはべりし昔は、馴れつかうまつりしに、御覧じ忘れにけるにや」と申し出でしかば、　（巻五）

のように、対話相手に対する「問い」の表現と考えられるものか、少なくとも、言語主体が対話相手に対して、自己の「疑い」を持ちかける意図のみられる表現であると思われる。また、手紙文における用例も4例みられるが、挿入句的に使用されている1例を除いて、

(36)開けてみれば、「二見の浦の月に馴れて、雲居の面影は忘れ果てにけるにや。思ひよらざりし御物語も今一度」など、こまやかに御気色あるよし申したりしを見し心の内、　（巻四）

のように、「問い」の表現と考えられる性格のものである。

なお、この(d)形式の用例の中には、

(37)（父）「……。御返事はまた申さじにや」とて、来る音す。　（巻一）

のように、本来、断定の助動詞「ナリ」に接続しないはずの、打消意志の助動詞「ジ」に「ニヤ」が下接している例がみられる。この事実は、「ニヤ」がむしろ独立したひとつの形式と意識され、独自の機能をはたしていたことを意味しているのではないだろうか。[注(3)]

さらに、

(38)よろづ見後まるるは、うれしとも言ふべきにやなれども、露消え

果てたまひし御事の後は、人の咎・身の誤りも心憂く、（巻一）

のように、中世期に多用される接続助詞的複合辞「ナレドモ」が、「ニヤ」に直接している用例もみられる。この事実は、本来「ニヤ」以下が省略されているという意識が薄れ、「ニヤ」で完結した形式として認識されるようになっていたことを意味しているのではないか。当作品には、「ニヤ」以下の省略されていない(c)形式の用例数が極端に少ないことも、「ニヤ」における完結性を示唆しているように思われる。

五　「――ヤラム。」の形式

前述のように、『覚一本　平家物語』においては、要説明疑問表現の場合、『源氏物語』で多用されていた、断定の助動詞「ナリ」の連用形「ニ」に係助詞「カ」の下接した「ニカ」の形式は全く用例がみられなかったが、これに近似すると考えられる性格の表現として「ニヤアラム」の形から変化したと言われ、中世期に多用される「ヤラム」の形を使用した「疑問詞――ヤラム。」の形式が全58例と多用されていた。また、要判定疑問表現の場合には、要説明疑問表現における「ニカ」の形に対応する「ニヤ」を使用した形式が全45例みられたが、「――ヤラム。」の形式も全27例使用されていた。

また、当作品における要説明疑問表現の場合、「ニカ」を使用する形式全39例に対し、「疑問詞――ヤラム。」の形式は全25例使用されていたが、地の文における用例が圧倒的に多く、「何とやらむ」「などやらむ」という類型的な表現が目立っていた。

これに対して、要判定疑問表現において、この「ヤラム」を使用する(p)形式は全16例みられるが、そのうち12例までは、

(39)台盤所ざまも人々心ことに、衣の色をも尽くしはべるやらむ。（巻一）

(40)御願文、草茂範、清書関白殿と聞こえしやらむ。（巻三）

(41)丹後の二郎判官といひしやらむ、奉行してたてまつるところへ、（巻四）

(42)すでに御格子参るほどになりて、御棺の入らせたまひしやらむ、御簾の透りよりやはらたたずみ寄りて、（巻五）

のように、地の文における用例で、(41)・(42)のように、挿入句的用法も4例みられる。会話文における用例3例は、

(43)新院、「雅忠卿女の歌はなど見えさぶらはぬぞ」と申されけるに、（大宮院）「労りなどにてさぶらふやらむ、すんしうて」と御返事ある。（巻三）

のように、いずれも「疑い」の表現と考えられる性格のものであるが、1例みられる手紙文における用例は、

(44)御返事には、「……。言ふかひなき北面の下臈風情の者などに一つなるふるまひなどばし候ふなどいふことの候ふやらむ。さやうにも候はば、こまかにうけたまはり候ひて、計らひ沙汰し候ふべく候ふ。……」とばかり御返事に申さる。（巻一）

のように、敬語表現と共に用いられ、婉曲的な「問い」の表現とみられるべきものであろう。また、心中思惟における用例は存在しない。なお、会話文における用例の中に、

(45)（院）「まさしく我を打ちたるは、中院大納言が女、四条大納言隆

親が孫、善勝寺の大納言隆顕の卿が姪と申すやらむ、また随分養子と聞こゆれば、御女と申すべきにや、二条殿の御局の御仕事なれば、……」と仰せ出だされたれば、（巻二）

のように、この形式が、「ニヤ」の形を用いる(d)形式と並立的に使用されているものがみられる。

六　文末用法の「ヤ」の形式

文末用法の「ヤ」を使用する形式は、『源氏物語』では用例数が多く、特に会話文で「問い」の表現として使用されている例が目立ったが、『覚一本　平家物語』においては、はるかに用例数が少なく、その用法も依頼・反語などかなり限定されており、純粋な「問い」の表現として使用されている例はごくわずかであった。

当作品の場合も、この形式は全9例と用例数が少なく、そのうち5例は反語の用例で、

(46)かねて思ひまうけにしことなれども、あへなくあさましき心の内、おろかならむや。（巻一）

(47)「……」と申されしを聞くにも、あはれはすくなからむや。（巻五）

のように、「ヤ」が推量の助動詞「ム」に下接したものが4例、残りの1例は、

(48)(女院)「天子には父母なしとは申せども、十善の床を踏みたまひしも、卑しき身の恩にましまさずや」など御述懐ありて、（巻一）

のように、打消の助動詞「ズ」に下接した形である。また、

(49)(大殿)「かかる老いのひがみはおぼし許してむや。……」など、御枕にて申さるる、（巻二）

のように、「テムヤ」の形で依頼表現と考えられる用例が1例みられ、純粋な「問い」の表現と考えられるのは、

(50)御所、「一人ならぬ罪科は、親類累るべしや」と御尋ねあり。「申すに及ばずさぶらふ。六親と申して、みな累りさぶらふ」など面々に申さるる折、（巻二）

(51)(院)「標結ふほどにもなりぬらむな。かくとは知りたまひたりや」と仰せらるれども、(作者)「さもはべらず。いつの便りにか」など申せば、（巻三）

など、3例のみである。

なお、文末の「ヤ」に、さらに助詞「ハ」の下接した(h)形式の用例が1例みられるが、

(52)(左衛門尉)「まことに立ちたまふやは」と言へば、(作者)「とまるべき道ならず」と言ひしかば、（巻四）

のように、「問い」の表現として使用されている。

七　文末用法の「カ」の形式

『源氏物語』では、文末用法の「カ」を使用する形式の用例数は、文末用法の「ヤ」を使用する形式の半数以下であったのに対し、『覚一本　平家物語』では、逆に約五倍となっていた。その用法についても、『源氏物語』では、心中思惟と会話文における用例がほぼ同程度で、会話文では、身分の上位者から下位者へ対して、明確に解答を要求しようとする「問い」の表現として使用されていたのに対

し、『平家物語』では、会話文における用例が圧倒的に多く、身分の上位者へ対する使用例もみられるなど、「問い」の表現形式として、文末用法の「ヤ」を使用する形式に代わって一般化していると考えられた。

当作品の場合も、この形式は全28例使用され、文末用法の「ヤ」を使用する形式よりはかなり用例数が多くなっている。その用法についてみると、過半数の15例は心中思惟における用例で、

(53)〈人まつ虫の声も、袖の涙に音を添ふるか〉とおぼえて、……、思ひつるよりもものあはれなる心地して、（巻二）

(54)〈まさに長き夜の寝覚めは、千声万声の砧の音も、わが手枕に言問ふか〉と悲しく、〈雲居を渡る雁の涙も、物思ふ宿の荻の上葉を尋ねけるか〉と誤たれ、（巻三）

(55)〈しばしかやうの寺にも住まひぬべきか〉と思へども、心のどかに学問などしてありぬべき身の思ひとも、我ながらおぼえねば、（巻四）

(56)御殿の下まで潮さし上りて、空に澄む月の影、〈また水の底にも宿るか〉と疑はる。（巻五）

のように、言語主体の「疑い」の表現として使用されており、

(57)あやしの者の腹に宿る人も多かり。それも、叔母は、祖母はとて、捧げおくべきか。（巻二）

のように、地の文における用例も1例みられる。残りの12例中11例は会話文における用例で、そのうち2例は、

(58)面々に、「兵部卿うつつなし。老いのひがみか。あが子がしやう、やさしく」など申して過ぎぬ。（巻二）

のように、「疑い」の表現と考えられるが、他の9例は、いずれも、

(59)この衣を着たれば、大納言、「なべてならず色も匂ひも見ゆるは、御所より賜はりたるか」と言ふも、胸騒がしくおぼえながら、「常盤井の准后より」とぞ、つれなく答へはべりし。（巻一）

(60)（院）「とは何事ぞ。わが御身の訴訟にて贖はせられて、また御所に御贖ひあるべきか」と仰せあるに、（公卿達）「上として咎ありと仰せあれば、下としてまた申すも、いはれなきにあらず」とさまざま申して、（巻二）

(61)（作者）「近くはべるか」と言へば、（修行者どもハ）津島の渡りといふ渡りをして参るよし申せば、（巻四）

(62)（作者）「誰が渡らせたまふぞ。……。あの侏人などがことか」と言へば、（召次）「さもさぶらはず。……」と言ふ。（巻四）

のように、「問い」の表現として使用されている。また、1例みられる手紙文における用例も、

(63)（作者）「さても、年をさへ隔てたまふべきか」と申したれば、（前斎宮）「げに」とて文あり。（巻一）

のように、「問い」の表現と考えられ、身分の上位者へ対するものである。

なお、文末の「カ」に、さらに助詞「ハ」の下接した(k)形式の用例が6例みられるが、そのうち1例が「疑い」の表現と考えられる以外は、

(64)善勝寺ぞ、「さてしもあるべきかは。医師はいかが申す」など申して、たびたびまうで来たれども、（巻一）

(65)何となく捨て果てにし住みかながらも、〈またと思ふべき世のな

らひかは〉と思ふより、袖の涙も今さら、　（巻四）

のように、反語表現として使用されている。

八　おわりに

以上、『とはずがたり』の要判定疑問表現について、主として『覚一本　平家物語』の場合と比較しながら概観してきたが、その特徴は、何と言っても「ニヤ」の形を使用する(d)形式の多用であろう。当作品における要判定疑問表現全体の約半数をこの形式が占めており、地の文において挿入句的に使用されている例が多く、特に全巻を通じて日次が一貫してこの形式で示されているのが目立っている。いずれにしても、地の文における、この(d)形式の多用が、当作品における一種の文体的特徴を作り出していると思われる。

この「ニヤ」の形は、中古和文に特徴的な表現形式と考えられることから、当作品におけるこの形式の多用は、当作品が中古和文の伝統を受継いでいることによるものとみられよう。

しかし、当作品には、「ニヤ」以下の省略されていない(c)形式の用例数が極端に少ないこと、また、用例(38)のように、複合辞「ナレドモ」が「ニヤ」に直接している用例もみられることなどから、本来「ニヤ」以下に省略があるという意識が薄れ、「ニヤ」で完結した形と認識されるようになっていたと考えられるのではなかろうか。当作品では、要説明疑問表現の場合も、「ニカ」以下の省略されていない形は極端に少なかった。また、『覚一本　平家物語』においても、「ニヤ」以下の省略された(d)形式はかなりみられたが、省略されていない(c)形式は極端に少なかった。さらに、用例(37)のように、本来、断定の助動詞「ナリ」に接続しないはずの、助動詞「ジ」に「ニヤ」が下接している例がみられるなど、いずれにしても「ニカ」「ニヤ」の形の性質が、中古の場合とは変質してきているのではないだろうか。

一方、当作品の要判定疑問表現にみられる、中世的特徴と考えられる性格として、次の諸点が挙げられよう。

①文中用法の「ヤ」を使用する形式における反語表現の場合、用例(2)のように、「ヤ」の係る述語文節で文の完結しない用例がみられる。

②「――ニヤ。」の形式とならんで、中世になって新たに生まれた「――ヤラム。」の形式も使用されている。

③文末用法の「ヤ」を使用する形式は、全体に用例数が少なく、反語・依頼などに用法が片寄り、純粋な「問い」の表現としての用例はわずかである。

④文末用法の「カ」を使用する形式は、文末用法の「ヤ」を使用する形式よりもかなり用例数が多くなっている。

このうち、②～④については『覚一本　平家物語』と共通で、①も要説明疑問表現の場合には同様の現象がみられた。また、④の文末用法の「カ」を使用する形式については、『平家物語』においては会話文での「問い」の用例が圧倒的に多いのに対し、当作品の場合、要判定疑問表現全体を通して「問い」の用例は少なく、この形式の場合も心中思惟における用例の方が多くなっている。

注

(1)拙稿「『とはずがたり』の疑問表現(上)――要説明疑問表現の場合――」(「日本文学研究」第32号〈一九九七年〉)

(2)拙稿「『平家物語』の要判定疑問表現」(「日本文学研究」第29号〈一九九三年〉)

(3)やはり、本来、断定の助動詞「ナリ」に上接しないはずの、過去推量の助動詞「ケム」に「ニカ」の形が下接している次の例が『源氏物語』にみられた。

(僧都)「……。(浮舟ハ)いかなるあやまちにて、かくまではふれたまひけむにか」と(薫ニ)問ひ申したまへば、(夢浮橋)

(拙稿「中古和文の要説明疑問表現――『源氏物語』を資料として――」(「日本文学研究」第26号〈一九九〇年〉))